

はじめに

本書は、内閣府の2019地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム（障害者分野）」をとおして知り合った9人の侍（コアリーダー）が、日本とイタリアの「インクルーシブ教育」の現状、相違点、強みと弱み、課題や問題点、そして、両国の地域社会や文化・風土にどう影響しているかを、イタリア訪問半年前からの事前学習、実際に訪問した10日間の体験談、訪問後の一年をかけての分析をまとめたものです。

インクルーシブ（inclusive）とは、「すべてを含んだ、包括した」との意味でありませす。

イタリアの障害を有する子どもの教育は、通常学校で同級生と同じ科目を同じ時間に学ぶことが保障されていきました。一方、日本の障害を有する子どもの教育は、通常学校内で特別支援学級と通常学級の併用や分離された特別支援学校への通学など、障害の有無や程度によって教育を受けられる環境は異なっています。

イタリアの「インクルーシブ教育」を見て、日本の「インクルーシブ教育」とは明らかに違うと思いました。どちらが「良いか悪いか」ではなく、どちらにも強みや弱みがあります。両国とも長年培ってきた文化・風土が創り上げてきたものだと思います。

また、私たちはイタリアで「知ることの大切さ、知ることによって恐れなくなる。知れば知るほど、偏見はなくなる」「障害者施策はコストではなく投資である。また、負担ではなく資源である」「環境が人々を創りあげてしまう」「障害を有する人々のみが利用するものではなく、障害を有する人々も利用できるものを創造する」などのイタリアの「インクルーシブ教育」の功績とも感じられる言葉・考え方をすべての訪問先で聞きました。2021年現在の日本ではまだ稀な考え方ですが、とてもすばらしいと思います。

「障害を有する人も有しない人も共に住みやすい社会」という考え方をしていくと、今日の多様性の時代にあっては、障害を「個性」として捉えることはもとより、あらゆる人が楽しく幸せな人生を送るための社会の実現という広い概念へとつながると思います。

本書が多くの方々に読まれ、日本でも今まで以上に「インクルーシブ教育」が理解促進され発展し、そして誰もが光り輝く「地域共生社会」の実現に、本書が資するものとなることを心より願っています。感謝。

（塘林 敬規）